

3. 東讃地域の弥生集落の動態

1. はじめに

今回の報告した成重遺跡を初めとして、東讃地域東かがわ市の番屋川・与田川・古川・湊川流域の弥生集落の調査事例が増加した。ここでは最も調査事例の蓄積が図られた弥生中・後期集落の特徴について簡単にまとめておくこととしたい。

2. 集落の時間的な動態

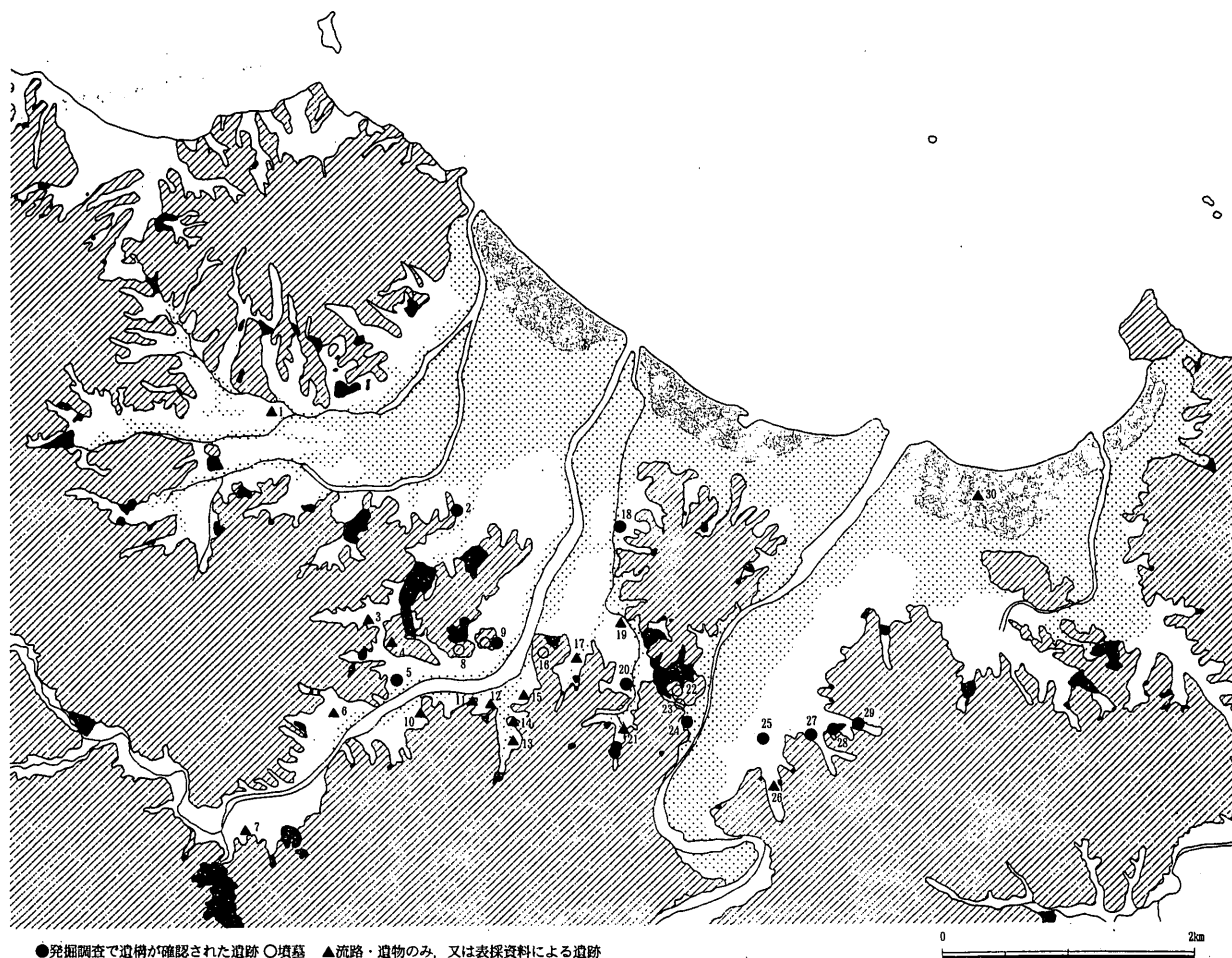
第412図には、地形面の概略と遺跡分布を表現しており、第13表には、現在までの表採資料による遺跡や発掘調査成果を基にして作成した遺跡の動態表である。

番号	遺 跡 名	時 期								備 考
		I	II	III	IV	V前	V後	終末	古墳初	
1	土居遺跡						△			
2	落合遺跡	○								
3	楠谷遺跡				○		○			
4	北山遺跡						?	?		
5	仲善寺遺跡					●	○	○		
6	大社遺跡							○		手焙形土器
7	水主神社遺跡				△					
8	高屋遺跡						△			壺棺墓
9	金毘羅山遺跡	○			○		●	○		丘陵上にはV後半～終末の墓地
10	風呂遺跡						△	△		
11	笠塚遺跡						△			壺棺墓
12	城ノ内遺跡				△		△			
13	飛谷遺跡				△		△	△		
14	別所遺跡						△			
15	別所池田遺跡							△		
16	塔ノ山南遺跡							●		石蓋土壙墓・箱式石棺墓・土壙墓
17	西谷遺跡		○							
18	住屋遺跡							●		
19	小僧遺跡	○					○			
20	原間遺跡	○	○		○	○	●	●		終末期鍛冶遺構
21	幸台池西遺跡				△		△			磨製石斧
22	樋端墳丘墓							●		墳丘墓・壺棺墓
23	樋端遺跡						●	●		土壙墓・壺棺墓・墳丘墓
24	神越遺跡						●			
25	成重遺跡	○	●	●	●	●	●	○		
26	成重北遺跡						?	?		
27	谷遺跡				●					
28	善門池西遺跡	○			●		○			
29	池の奥遺跡			●	●		○			磨製石斧
	合計 1	6	3	2	10	3	18	12		
	合計 2	6	3	2	7	3	10	9		

●調査で遺構が確認された遺跡○流路資料及び遺構に伴わない形で遺物が出土した遺跡

△表採資料による遺跡

第12表 遺跡動態表



第 412 図 遺跡分布図（番号は第 13 表に対応）

遺跡分布は、主要河川沿いの段丘面上か谷部に多く立地する傾向がある。発掘調査が多く実施されていないことを踏まえると、海浜部における遺跡分布を考慮する必要があるものの、本地域の集落展開の一定の傾向を示している可能性はある。また、詳しくは後述するが、丘陵上に立地するものは、墳丘墓や土器棺墓等から構成される墓地としての性格をもつものが少なくない。

時期別な変遷では、継続型の集落が乏しい。成重遺跡は、動態表ではⅡ期以降継続するように見られるが、Ⅲ期前半やⅤ期前半などに短い空白期を挟んでおり、必ずしも同一地点に住居群が継続して営まれた訳ではない。全時期を通して移動性に富んだ集落分布と捉えるべきであろう。

また、前期から中期前半までの明確な集落検出事例が殆ど見られない。落合遺跡は、包含層資料であるものの遺物出土状況から、近接する位置に集落を想定できる。前期段階の集落は、最古段階の遠賀川式土器は伴わず、逆L字状口縁甕に代表される前期後半期に属することで共通している。凹線文出現期前後のⅢ～Ⅳ期初頭には、与田川中・上流域の金毘羅山・楠谷遺跡や湊川流域の成重・池の奥遺跡を中心に集落構成が判明する資料が見られる。表採遺物による遺跡を含めれば、Ⅳ期には遺跡数も増加する傾向がうかがえる。

後期前半であるⅤ期前半の遺跡数の落ち込みが激しいが、Ⅴ期後半には遺跡数が再び増加する。特に前段階まで希薄であった古川上流域の原間遺跡を中心に、与田川中流域の金毘羅山遺跡周辺にも集落が多く出現する。先に見た丘陵上に墓地が確認されはじめるのも本段階である。これらは、住居群に近接した丘陵上に占地する傾向がある。終末期に若干の減少が認められるが、Ⅴ期後半段階の集落は維持

されている可能性が高く、丘陵上の墓域も継続するものと見られる。そして、古墳初頭にはすべての集落が廃絶・移動するものと考えられる。

3. 凹線文出現前後の集落

湊川下流域東岸では凹線文出現前後の集落がまとまりをもって確認されている。第 413 図には、各遺跡の調査範囲と周辺における試掘調査のトレンチを地形分類図上に示している。

地形面は、南東に存在する山地・丘陵とそれに付着する高位段丘又は扇状地面と、湊川の沖積作用による谷底低地部と自然堤防の微高地から構成されている。本書第 2 章で検討したように、現湊川の東側には広大な氾濫原面が形成されている。谷底低地の中には、微高地が多く存在しているものと考えられるが、ほぼ完全に埋没していることが予想され、明確な形で提示できない。

住居の分布状況は、池の奥遺跡で多くの住居が存在するように見えるが、同時併存で 3 棟を越えるものではなく、2～3 棟ほどの住居群が東西で 1 km 程の範囲の中に、間隔を空けて 7 単位程点在している景観が復元できる。

次に、住居群同士の繋がりの実態が問題となる。池の奥遺跡における単位 6,7 の 168 点にも及ぶ磨製石斧類の多さが注目されよう（西岡 2003）。一定の時間幅を見積もる必要があるが、磨製石斧類を多量に保持している住居単位であることは否定できない。単位 3 に相当する成重遺跡Ⅱ区では、遺物総体で柱状片刃 3 点のみであり、伐採用の両刃石斧にいたっては 1 点も確認できず、池の奥遺跡の単位 6,7 とのコントラストは強いものとなっている。池の奥遺跡の単位 6,7 は、谷部の丘陵斜面に立地していることから推測して、原木の伐採・粗加工にやや傾斜した住居群と見ることができると言えよう。この単位 6,7 からサヌカイト製の板状素材の出土や、打製石庖丁素材と考えられる横長剥片が出土している点も注目される（森下 2002）。現状で各単位の様相は明らかにしえないが、他の単位ではこの横長剥片は見られないことから、庖丁などの道具類の生産に関しても各住居群で役割分担がなされていた可能性も考えられる。この点は、各遺跡の本報告を待って更に検討を深めたい。

4. 後期の集落

後期後半～終末段階の集落構成を比較的調査が広範囲に行われている原間遺跡中心に見てみよう。原間遺跡は、小規模河川である古川上流域の段丘上に立地する。流路資料に前・中期資料が見られるが、住居群が明確に展開するのは後期中葉から終末の段階であり、これまでの調査で約 50 棟程度の住居が確認されている。第 412 図の地形分類は、木下晴一氏の分類案（木下 2000）に準拠している。

a. 遺構時期決定に関する土器編年案

住居の同時併存を抽出する作業として、原間遺跡出土資料を中心に周辺の遺跡のものを加えて土器編年を検討する。未だ資料不足の観が否めないが、後期中葉から古墳時代初頭を 6 期に細別する試案を提示する。

後期中葉 原間遺跡 S R V 03 土器溜り・原間遺跡 S H V 01 を標識資料とする一群である。長頸部壺の口縁部の外反は弱く、胴部最大径も上位にある。甕の底部は明瞭な平底を有し、胴部最大径も上位に存在する。高杯は、脚部が長く口縁部の外反も顕著なものではない。搬入土器で高松平野北東部地域

産の可能性がある下川津B類系統の甕(以下、下川津B類と記す)は、底部が突出し胴部最大径が上位にある。口縁部の折り返しも顕著ではない。高杯は口縁部の外反が弱く、口縁端部が僅かに拡張されるものが伴う。既往の編年では、大久保氏の讃岐①段階に併行するものと考えられる(大久保2002)。

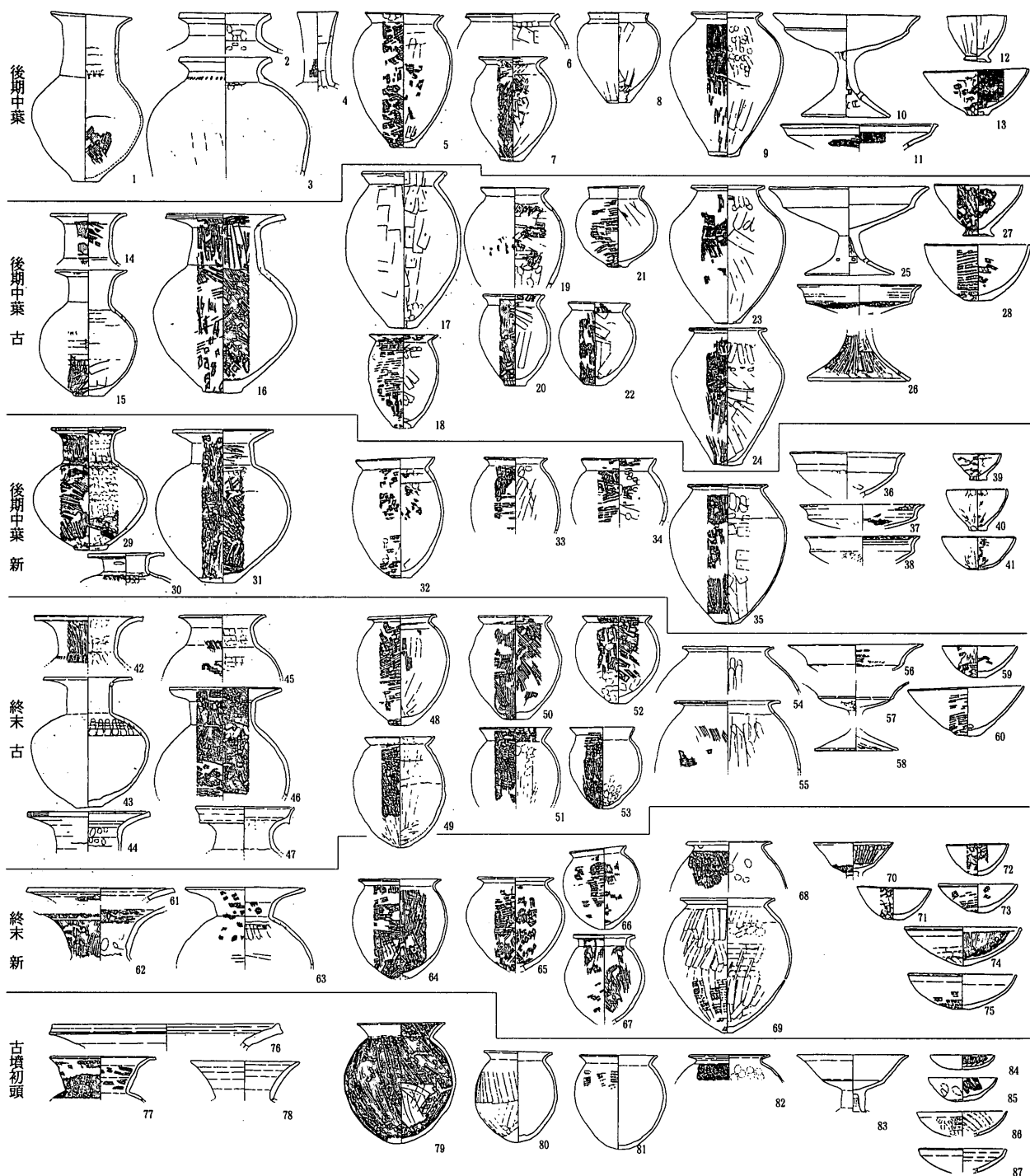
後期後葉 古段階 原間遺跡SKⅢ20・同遺跡SEV01・同遺跡SKV03・同遺跡SRⅢ03⑥層土器溜りを指標とする一群である。長頸壺や広口壺の胴部最大径は下がり、全体が球形化するとともに、口縁部の外反が強くなる。広口壺は頸部が内傾し、口縁部が大きく開くもの(16)が出現する。甕の胴部最大径は下がり、全体的に球形を指向するものの、依然平底をとどめている。鉢には明瞭な変化が見られず、脚台状の鉢も前段階から引き続いて見られる。高杯は、中位で屈曲する短い脚部をもつものが出現し、口縁部の外反もやや強いものとなる。搬入系統の下川津B類土器は、甕の胴部最大径が下がるとともに底部と胴部下半の境が不明瞭となる。口縁部の折り返しもややきついものとなっている。高杯では口縁部の外反が発達し、口縁端部の拡張は見られない。既往の編年では、大久保の讃岐②段階に併行するものと考えられる。

後期後葉 新段階 原間遺跡SHⅢ02・同遺跡SHⅢ04を標識とする一群である。長頸・広口壺ともに胴部の球形化一層進行する。口縁部の外反が顕著となり、頸部はやや短くなる傾向を示す。甕は、主に下半部の球形化と同時に、矮小な平底を呈する。高杯は、杯部径が縮小し、杯部自体が深いものとなる。鉢は、前段階からの脚台状の底部をもつものが残存するが、全体的に小型化するとともに、底部は小型化し丸底に近くなる。搬入系統の下川津B類土器の甕(35)は、胴部下半の球形化が進行するとともに、僅かながら平底を止める底部から連続して立ち上がる。口縁部の折り曲げはあまり変化が見られない。高杯は、口縁部の外反が強くなり、杯部下半が丸みを帯びてくる。既往の大久保編年の讃岐③段階に併行すると考えられる。

終末期 古段階 原間遺跡SEⅢ01・森広遺跡Ⅲ次SH01・寺田産宮通遺跡SH06を典型例とする。広口壺は頸部から連続して外反するもの(42)口縁部が水平に近く屈曲するもの(43)などがあり、頸部が内傾し口縁部が直線的に開くもの(45,46)は胴部最大径が更に下降する。底部形態が判明する資料に乏しいが、頸部のくびれが強くなるとともに、ほぼ丸底化するか矮小な平坦面をとどめる底部となる。中には(49)のような、尖底のものも見られる。高杯は、短脚化と杯部の外反がより進行し、量的にも減少する。鉢は、前段階まで継続した脚台様の底部をもつものが消滅し、底部はほぼ丸底化する。搬入系統の下川津B類甕(54)は、肩部から胴部にかけて球形化が進行し、口縁部の折り曲げもきつくなる。(55)は、下川津B類甕を在地で模倣したものである。

既往の編年では、大久保の讃岐④と⑤段階の一部に併行するものと考えられる。

終末期 新段階 原間遺跡SHⅢ04 石田高校校庭内遺跡SH32出土資料を典型例として設定した。広口壺(61,62)は頸部から連続して大きく外反するようになる。広口壺(63)も頸部と口縁部の境は不明瞭となっている。甕は球形化を更に指向するが、底部は尖底気味の丸底となっている。高杯は、杯部が直線的に外反する(70)が僅かに見られるが、後期後葉のものと比べて形態的に隔たりが大きく、同一系譜と考えられない。中形鉢は(74,75)は、器高が浅いものとなる。搬入系統では、下川津B類土

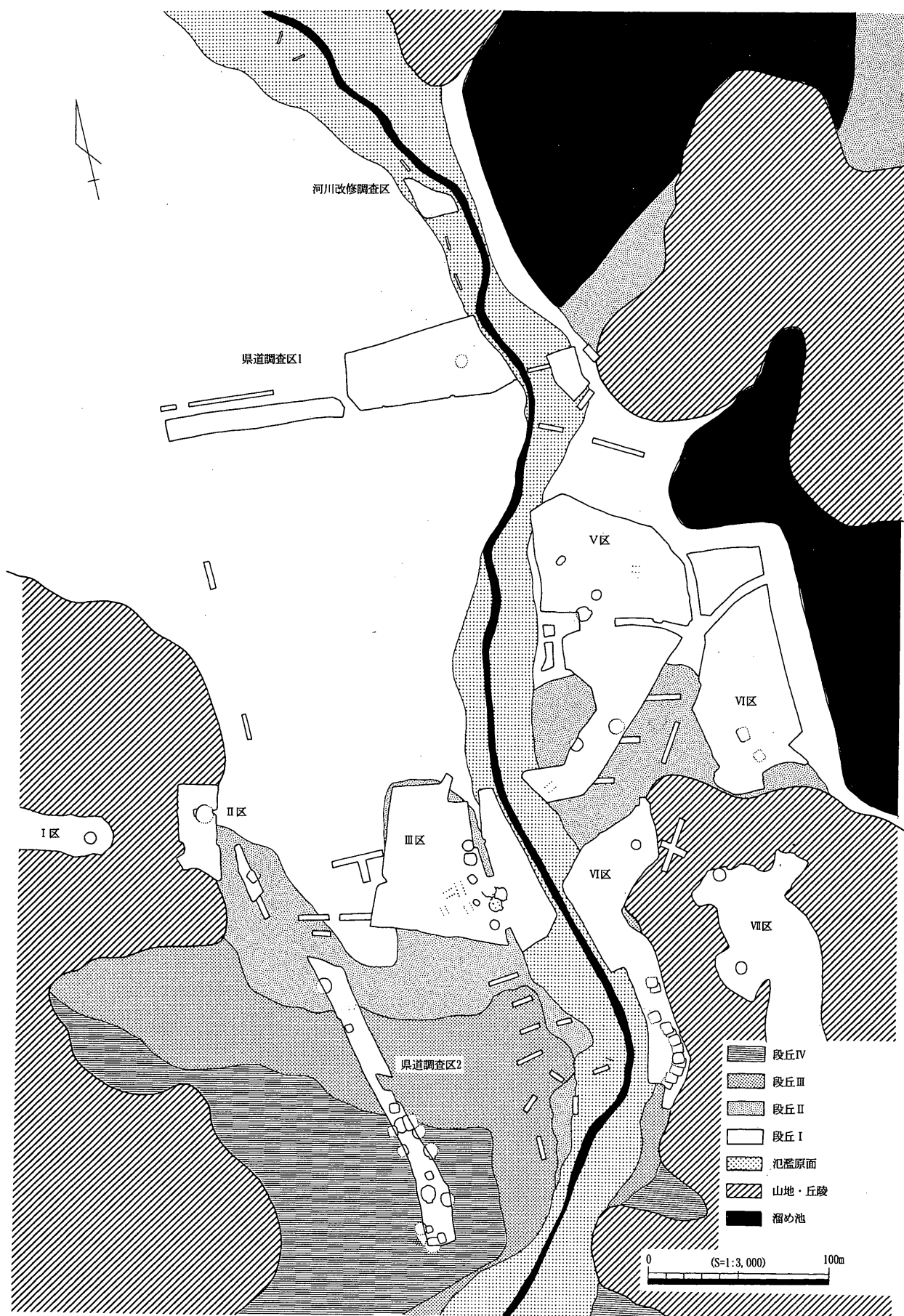


後期中葉：1～13 原間SRV03土器溜り
 後期後葉 古：14, 19, 23原間SK03 25, 原間SKⅢ20 27, 原間SEV01 15～17, 20～24, 28原間SRⅢ◎唇土器溜り
 26成重Ⅰ区SE02
 後期後葉 新：30 原間(県道調査区)Ⅱ区SH01 32, 35～37, 原間SHⅢ02 33, 34原間SHⅢ03 29, 成重Ⅱ区SX08 37, 38成重Ⅰ区
 SH05 31, 金毘羅山SR01
 終末 古：44, 原間(県道調査区)Ⅰ区SH05 48, 50, 52, 55, 59, 60原間SEⅢ01 54, 原間SXⅢ03 42, 47, 49森広SH03 45, 53, 56～58,
 寺田・産普通SH06 43, 森広ST301
 終末 新：61, 69, 74, 75石田高校校庭内SH32 62, 原間(県道調査区)Ⅰ区SH06 68, 原間(県道調査区)Ⅱ区SH05 70, 原間(県道調査
 区Ⅰ区SH02) 63, 原間SRⅢ03 64～67, 71～73原間SHⅢ04
 古墳初頭：76～78, 82, 83～87森広SH208 79, 森広SH316 80, 81森広SH314

第 414 図 東讃地域における弥生後期後半から古墳初頭土器編年

器が減少し、東阿波型の甕 (68) が見られる。(69) には片岩粒が認められないものの、胴張りの器形や尖底の底部形態に、東阿波型の強い影響が想定できる。(62) は、下川津 B 類系統の広口壺である。

既往の編年では、大久保の讃岐⑤段階の一部と⑥段階に併行するものと考えられる。



第 415 図 原間遺跡における弥生後期の後半から終末期の住居配置

古墳初頭 本段階に、集落が廃絶・移動に向かう原間遺跡内には良好な資料は認められないが、森広遺跡に良好な資料が存在する。森広遺跡 S H 208・S H 314・S H 316 を典型とする。(76) の広口壺の口縁部は肉厚なものとなり、端部は確実に面取りされる。(77.78) の広口壺は頸部から口縁端部まで連続して外反する形態となる。甕は全体的に均整のとれた球形化が達成される。高杯は、杯部中位で明瞭に反転する古墳時代的なものとなり、鉢は器高が浅くなり、手づくね様の矮小な小型のもの 84 が出現することが指標となる。

既往の編年では、大久保の讃岐⑦段階に併行するもの考えられる。この編年試案をもとに、原間遺跡の住居群の変遷をトレースして見よう。

b. 集落の住居群の在り方とその変遷

後期中葉 比較的低位の段丘上に住居が散在し、4 棟程の住居から構成されている。段丘Ⅰ、Ⅱ面上のⅢ・Ⅴ区・県道調査区 1 付近に住居が見られ、最大で 1、2 棟程度の小規模なまとまりを示す。

後期後葉古段階 前段階と比較して広範囲に 15 棟程度の住居が展開している。Ⅲ、Ⅴ区に加えて、東西の丘陵上や南側の比較的安定した段丘Ⅲ、Ⅳ面上に位置する県道調査区 2 の部分や、古川東岸のⅣ区等に新たに住居群が営まれ、全体で 7 群程度の単位が抽出できる。各単位 2～3 棟程度の住居から構成されており、過度に集中する単位は確認できない。

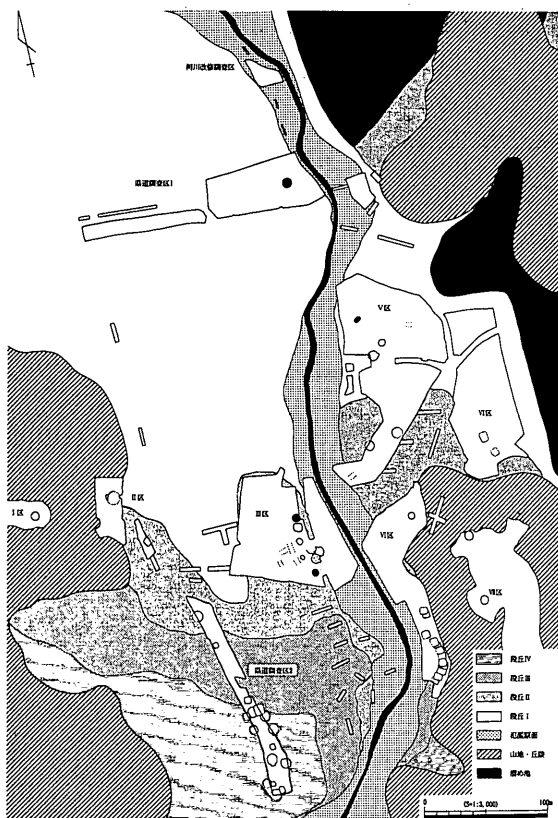
後期後葉新段階 Ⅰ、Ⅶ区の丘陵上の住居群は廃絶するが、他の住居群は維持されている。県道調査区 2 やⅣ区の部分で 4 棟程度の住居が展開するが、前段階と比べて規模的な差異は見られない。なお、張り出し付の円形住居は本段階まで継続して見られる。

終末期古段階 Ⅳ区に 1 棟の住居が確認できるが、県道調査区 2 の段丘Ⅲ、Ⅳ面上に住居群が限られるようになり、散在傾向にあった前段階と傾向を異にする。また、未調査地部分にどの程度の住居が存在しているのかは不明であるが、一箇所に集中して居住しているのであれば、各単位が結合した可能性もある。調査範囲内では 3 棟程度の住居から構成されている状況が伺える。

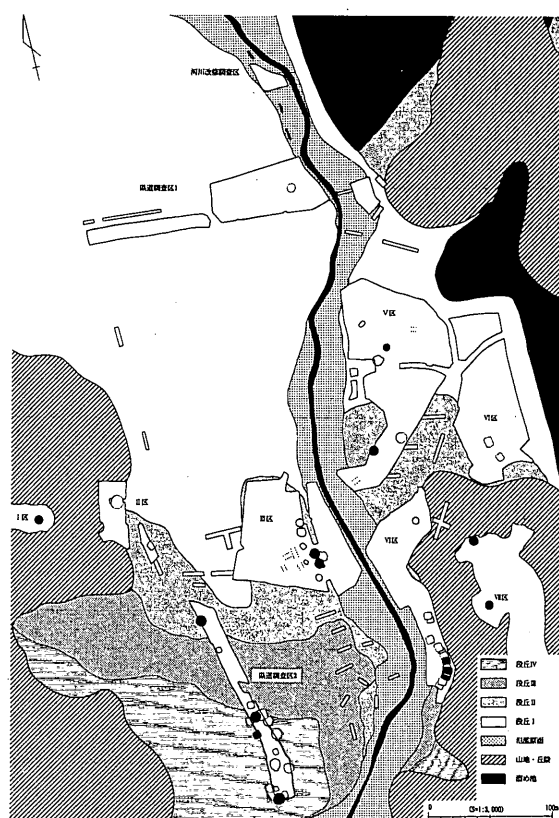
終末期新段階 前段階に引き続いて、住居は県道調査区 2 の部分に集中して見られる傾向は変わらない。この部分では、5 棟程度の方形住居が分布している状況である。

古墳前期に帰属する住居は確認できないことから、集落自体は廃絶するか他の場所へ移動したものと考えられよう。

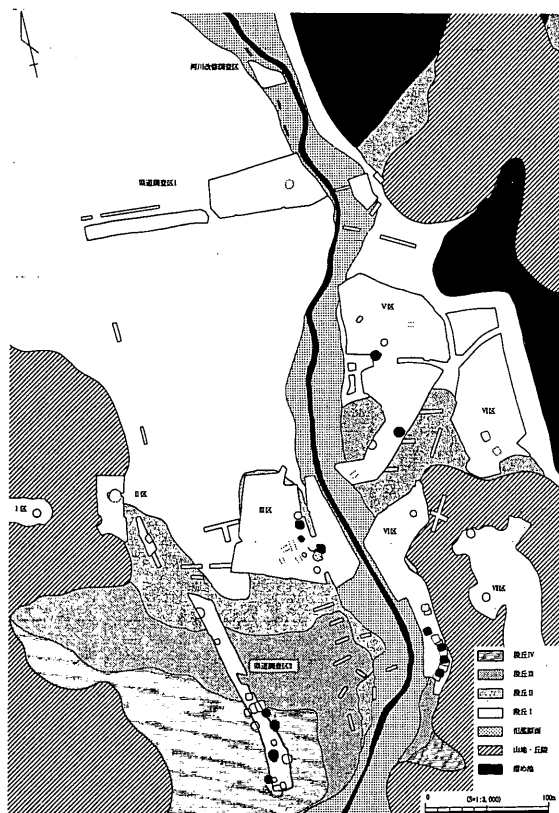
以上のように、全体的としては、一見大規模に見えるが、細かな時期別の変遷では住居群が移動している状況が想定できる。また、最大で 5 棟程度から成る住居群が 4～7 箇所程度に分かれて分布しており、単一箇所に住居が集中する傾向は見られない。また、Ⅳ区の住居群は方形住居で当初から統一されており、出土土器の組成の分析を行った片桐氏によれば、他の住居群に比べて搬入系統である下川津 B 類土器の出土量が多い点が明らかにされており、これをもとに他地域から移動してきた集団の存在が指摘されている(片桐 2002)。住居形態と遺物が集団の出自を反映したものかどうかは今後更に検討する必要があるが、住居群毎で住居形態や出土遺物組成に差異が見られるという指摘は重要である。今回は、同時併存の住居とその変遷の抽出に終始しているが、今後は遺物組成に目配りした検討が必要と思われる。



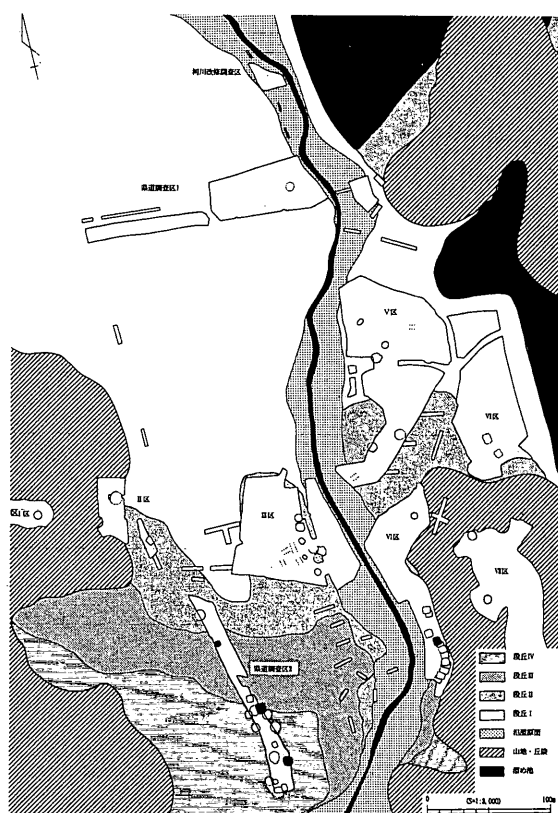
後期中葉



後期後葉 (古)

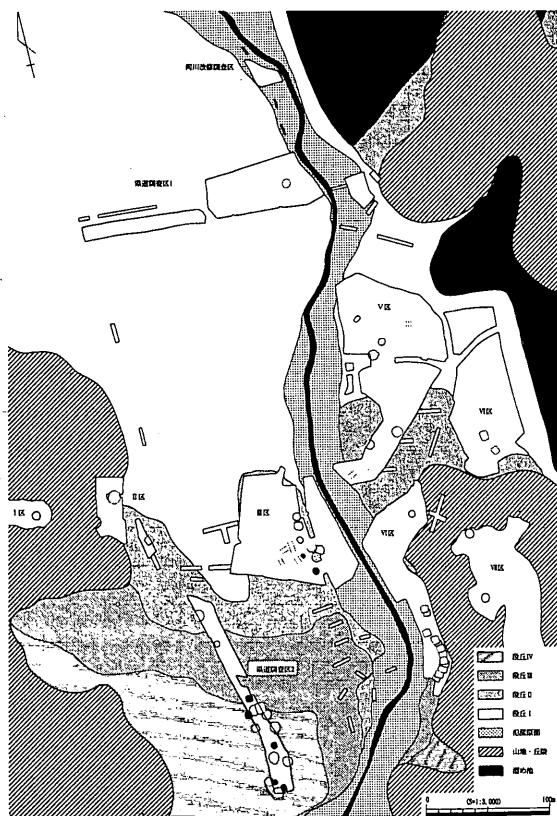


後期後葉 (新)



終末 (古)

第 416 図 原間遺跡における住居群の変遷 その 1



終末 (新)

第 417 図 原間遺跡における住居群の変遷 その 2

5. 後期の集落と墓域

遺跡数が増加する後期後半段階には、丘陵上で多くの墓域が確認されている。ここでは、原間遺跡周辺の与田川から湊川までの地域を対象として集落との位置関係を整理する。

調査や表採資料で明らかになった墓制資料は第 14 表のようなものがある。一部、原間遺跡では住居群に隣接して土器棺墓が見られるが、これらは少数に留まっており、集落域とは隔絶した丘陵上に墓域が設定されるのが一般的であったと考えられる。第 418 図には、後期後半から終末までの集落と考えられる遺跡と墓域と考えられる丘陵上の遺跡を示してある。集落と考えられる湊川西岸の神越遺跡と古川上流域の原間遺跡の間には、樋端墳丘墓や樋端遺跡などの墓域が見られる。原間遺跡と与田川西岸の金毘羅山遺跡の間には、塔の山南遺跡等の墓域が存在する。金毘羅山遺跡は、西側の丘陵上やその周辺に高屋遺跡などの墓域を伴っている。他の遺跡は、表採資料であることから断定することが難しいが、笠塚遺跡

では土器棺片と考えられる大型壺の破片が多く出土していることから、城ノ内・飛谷遺跡に対応した丘陵上の墓域の可能性が考えられる。原間遺跡で見たような複数の住居群から集落が構成されているのが本地域の一般的な状態とすれば、一つの集落に対応するように周辺の丘陵上に墓域が形成されるが通有であったと考えられる。

遺跡名	内容	時期	備考
樋端墳丘墓	直径 18m 程の円丘墓, 内部主体竪穴式石槨 1	終末 古	
樋端遺跡	墳丘墓 2, 土壙墓 36, 石棺墓 2, 土器棺 26	後期後葉～終末期古	墳丘墓は後期後葉古
塔の山南遺跡	石蓋土壙墓 1, 箱式石棺墓 1, 土壙墓 5,	終末 古	
金毘羅山遺跡	墳丘墓 1, 小型箱式石棺墓 1, 土壙墓 1, 土器棺墓 4	後期後葉～終末期古	
高原遺跡	土器棺墓 1	後期後葉 新	
笠塚遺跡	土器棺墓?	?	大形壺片採集
北山遺跡	土器棺墓?	?	
別所遺跡	土器棺墓?	後期後葉 古	

第 13 表 墓域が確認された遺跡一覧

また、樋端墳丘墓や金毘羅山遺跡墳丘墓に見られる竪穴式石槨の採用や墓域からの破鏡の出土などを考慮すれば、共同墓地の中でも階層差が顕在化している状況が想定できる。

原間遺跡を中心とした住居配置の検討では、このような階層差を示す状況は見られなかったが、後期後半以降終末期まで継続して住居群が形成される原間遺跡の近傍に樋端墳丘墓が出現している点は注意



第 418 図 後期後半から終末にかけての集落と墓地の分布状況

されよう。

6. まとめ

今回は中・後期の代表的な遺跡を取り上げて遺構配置・変遷を検討するにとどまった。中期後半の凹線文出現期の成重遺跡周辺では2～3棟程度の住居のまとまりを住居群と呼称し、それらが間隔を空けつつ1km程度の範囲の中に7基程点在する状態にあったことを確認した。後期後半から終末にかけての原間遺跡の検討では、2～5棟程度の住居群が移動・消滅を繰り返しながら、2～7基程存在することが明らかになった。中期後半と後期後半から終末の比較では、集落景観自体に大きな変化は見られない。しかし、後期後半以降、遺跡数は確実に増加しており、何らかの変化を想定できる。また、中期段階で不明瞭であった墓域が丘陵上に固定的に営まれ、墳丘墓の出現など墓地の在り方の変化が見られるのも本段階である。現時点では、この変化の内実を明らかにしえないが、今後、遺物論を加味した分析を進めれば、各集落における住居群同士の繋がりの実態や、墳丘墓に示された階層差の発現について明かになるものと考えられる。今後の検討課題としておきたい。

- 西岡達哉 2003『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四十六冊 池の奥遺跡・金毘羅山遺跡Ⅱ』香川県教育委員会 (財)香川県埋蔵文化財調査センター他
- 森下英治 2002「石器の生産と流通」『第16回古代学協会四国支部研究大会 弥生時代前期末・中期初頭の動態—研究発表要旨集—』古代学協会四国支部
- 大久保徹也 2002「四国北東地域における地域的首長埋葬儀礼様式の成立時期をめぐって」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会
- 木下晴一 2000『埋蔵文化財試掘調査報告XⅠ』香川県教育委員会
- 片桐孝浩 2002「第4章まとめ3. 弥生集落について」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三十九冊 原間遺跡Ⅰ』香川県教育委員会 (財)香川県埋蔵文化財調査センター他